

部員各位

平成 25 年 6 月 8 日

明治大学雄辯部

桐生常朗(政経 2)

世界はどこに向かうのか？

～目次～

- 1 初めに
- 2 国際社会に於けるパワーについて
- 3 パワーの要素
- 4 これからの世界について
- 5 日本のとるべき政策
- 6 論点
- 7 出典

1 初めに

世界情勢は変化に変化を重ねている。冷戦の終結でアメリカの覇権が強固になった一方で、近年では「アジアの再興」に伴う力の移行、テロの台頭による力の拡散などによりアメリカの覇権の弱体化が叫ばれている。また、日本に於いては、アメリカに対する不信感や中国の台頭などを背景に、他国とどのように付き合っていくか、という議論が多くなされている。現在の世界情勢をどのように見るか、またこれから世界はどのように変化していくのか、を考察する事は今後の日本の対外戦略を語る上で必要不可欠である。今回は、今後の世界情勢を考察しつつ、日本のあるべき姿について考えていきたい。

2 国際社会に於けるパワーについて

2.1 パワーの特徴とその定義

国際社会に於ける力(パワー)は非常に重要な概念である。他国を考えた場合、友好国か敵対国かにかかわらずその国がどの程度のパワーを持っているかを想定することは外交戦略や安全保障戦略を考える上での出発点であるからだ。

一方で、パワーは実に広く使われている概念であるにもかかわらず、非常に捉え難く測定も難しい。長年、さまざまな研究者が国際社会に於けるパワーを数値化、計量化しようと試みてきたがやはり明確な答えは出ていない。

このように、「重要であり捉え難い」パワーであるが、政策という点からは一般に「望む結果を生み出す能力」と定義される。

2.2 パワーの分類

このように定義した上で、パワーは最も単純な形で2つに分類することができる。すなわち、ハード・パワーとソフト・パワーである。

2.2.1 ハード・パワー

パワーの1つめの側面として、ハード・パワーがあげられる。これは、端的に言うと「押す力」と表現することができる。もう少し詳しく述べると「意思に反する行為をさせる能力」と言える。例えば、キューバ危機の際、ソ連がキューバからミサイル撤去を行ったのはアメリカの核のハード・パワーがソ連にうまく機能したと言える。

2.2.2 ソフト・パワー

パワーのもう一つの側面として、ソフト・パワーがあげられる。これは、ハード・パワーの逆の概念であり「引く力」ともたとえられる。信頼や共感を得る事で他国を自国が望むように行動する意思をもたせる能力である。例えば、イラク戦争の際、イギリスのブレア首相が政府声明として、アメリカの武力行使を支持し、共に参戦すると表明したのは、アメリカがイギリスと価値観を共有しているというソフト・パワーによるところが大きい。

3 パワーの要素

パワーにはそれを生み出す源泉としての要素が存在する。パワーの要素それぞれについて考察する。

3.1 軍事力

軍事力について語る場合、多くの人は戦闘や威嚇のようなハード・パワーの行

動の要素として語る。実際、軍事力は国家の持つ唯一の物理的な力であり、ハード・パワーの要素としての重要性は非常に高い。しかし、軍事力は例えば友好国を助けるために使えばソフト・パワーとして機能する。(表1参照) また、軍事力の特徴の一つとして即応性が高いこともあげられる。

「軍事力の究極手段(核兵器)が事実上使えないこと」「軍事力はそれ自体のメッセージ性が強く、ナショナリズムが強い社会に対して使う際にはコストが高くなること」「(特に先進国に於いては)軍事力の行使は国内的な制約に直面すること」などを背景に軍事力の有用性が近年特に低下しているとみる人もいる。

戦時	主要都市などの重要地点の攻撃
	工業地帯などの国家としての重要地域の攻撃
	軍事施設などの攻撃
	限定地域外の軍事施設・艦艇などの攻撃
	防衛(交戦)海域などの設定
準戦時	海上封鎖等による経済的圧迫
	対象国に向かう船舶などの臨検・抑留・拿捕
	対象国にとり重要な地域陸海空路の封鎖
	対象国周辺への軍事力の集中・展開
	艦艇の配備・編成替えなどによる意思表示
平時	武器の売却・教官派遣・留学生の受け入れによる友好関係や勢力圏の拡大
	共同訓練などによる友好関係の増進
	災害救助・医療支援・測量支援などのための軍隊派遣
	艦艇・部隊などの相互訪問・国家行事への参加

表 1 軍事力(海軍戦力)によるエスカレーションの具体例

3.2 経済力

国内総生産、食糧自給、戦略産業の構成、戦略資源の分量、外貨準備、自国通貨の信頼性などから構成される。経済力も軍事力同様ハード・パワーとしてもソフト・パワーとしても使用されうる。例えば、経済制裁として経済力を用いればハード・パワーとなるし、経済発展が他国に魅力に映ればソフト・パワーにもなりうる。

一方で、特に資本主義国家に於いては経済活動の主体である民間企業と政府には直接的な関係は無く、パワーとして用いる場合の効果には疑問が残る。また、グローバル経済が高度に発展した現在に於いては経済的な相互依存が増大しており経済力をパワーとして使用出来る領域は非常に限られている、と述べる人もいる。

3.3 魅力

その国の魅力はしばしばソフト・パワーとして機能する。文化、情報力、政治体制、国家理念などが他国にとって魅力に映れば他国を自国にとって有利な方向へ導きうる。

近年、軍事力や経済力に対する制約を背景にソフト・パワーの重要性が取り上げられ、自国をいかに魅力的にするか、魅力的に見せるかなどが議論されている。政策として具体的に行われるものは、正しい情報の発信や、いわゆる「クール・ジャパン」のような自国の売り込みまで多岐にわたっている。

4 これからの世界について

このように多種多様な性格を持つパワーであるが、今後国際社会に於いてこのパワーがどのように分布していくのか、という点について主に2つの意見がある。一つは、パワーは（今まで通り）一極集中するという意見である。もう一つは、パワーは今後分散し多極化に進むという意見である。

4.1 一極化

国際社会に於ける一極化とは、パワーがある一国に集中していく状態を指す。現在の国際社会では、超大国としてのアメリカの覇権が今後も維持、促進されていく、という意味で用いられる。

4.1.1 軍事力

アメリカ軍事力は他の国全ての軍事力を合わせたものよりも強大であると言われている。その豊かな経済力を背景に軍事費にも多くの予算を咲いており、2012年度に於いては6820億ドルと2位の中国の1660億ドルを大きく引き離している（世界全体の軍事費は1兆7500億ドル）。また、世界中に駐留軍を置いており、11の空母打撃群（全世界で21群）を背景に7つの海での制海権を有している。核戦力に関しても質・量ともに世界で突出している。技術力の高さゆえに、核兵器のみならず兵器全体でみても質が高いと言われ、世界で取引される兵器の半分近くがアメリカ製で、軍事産業においても世界一になっている。地政学的な側面では、周辺に大国が存在せず、ユーラシアの大国とも大洋により隔てられており大規模揚陸が極めて困難な場所にあるといえる。

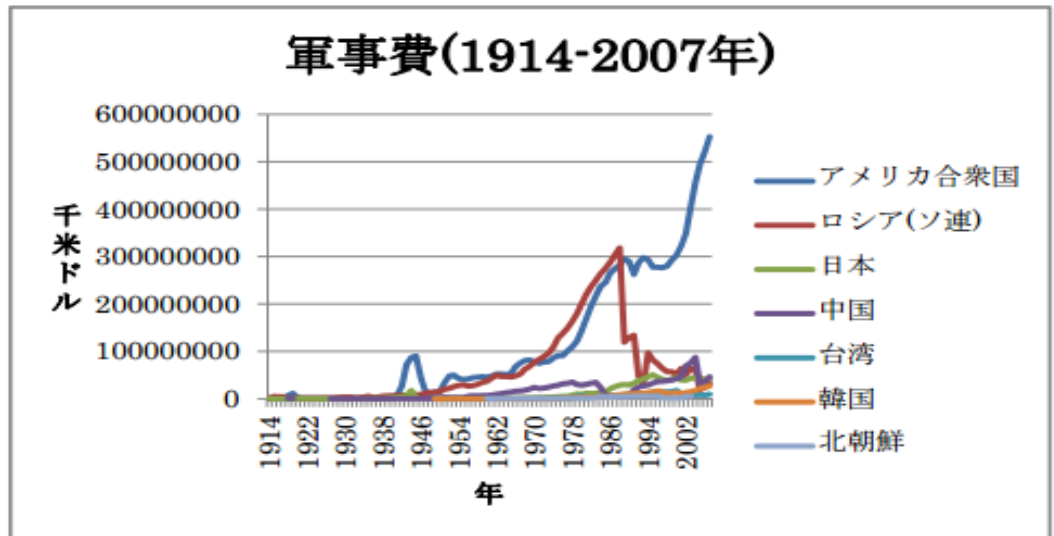


図 1 軍事費の推移

4.1.2 経済力

アメリカは全世界の経済生産の2割以上を占めており、GDPに於いては、2位の中国の2倍以上の大きさを誇っている。また、広大な土地により石油・石炭などの資源も豊富であり、近年ではシェールガス革命を背景に世界最大の天然ガス産出国となっている。経済を支える人口動態についても、先進国中ではほぼ唯一持続的に増加しており、人口グラフも「釣鐘型」と呼ばれる理想的な形となっている。また、基軸通貨ドルを有するアメリカは事実上利子を払わなくてよい国債を大量に保有している事となる。

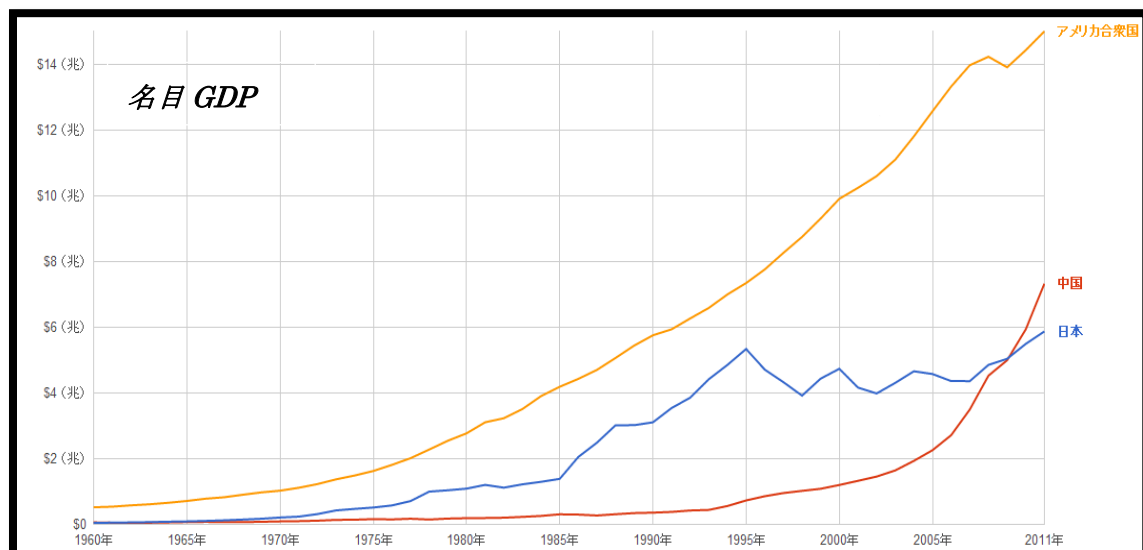


図 2 アメリカ・中国・日本の GDP の推移

4.1.3 ソフト・パワー

学術分野に於いては各分野の権威や学術会議が集中している事。事実上の世界共通語である英語を使用している事。現在先進国に共通する資本主義や民主主義などといった基本的な価値観を生み出した、もしくはいち早く取り入れた国である事。現在、世界を席卷する大衆消費文化を生み出した国である事などが文化の発信力の高さも相まって、世界中にアメリカの魅力として伝わっている。さらには、その突出した軍事力・経済力を背景に多くの国との同盟を通じて、アメリカ覇権の支持を取り付けている。

フランシス・フクヤマ

いかなる状況にあっても、近代自然科学の人間生活に対する支配力が衰える可能性はゼロに近く、世界は程度の差こそあれ近代化の方向へ向かっている。しかしながら、中央計画経済では現実的には適正な価格の管理は不可能であり技術の向上に対する適切な報酬は期待できない。また、21世紀のようなグローバル経済の元では、世界市場を相手にできない中央計画経済では大きな経済発展は見込めない。これらを背景に、世界は近代化の過程で資本主義と市場経済へ進んでいく。

また、歴史の発展の原動力は精神的な優越願望・対等願望の対立によって生じると考え、政治的権利、機会、ルール of 平等が達成されたら、もはや不合理は存在せず、大規模で組織的な内乱も反乱も起きなくなり（奴隷が反乱を起こす理由がなくなる）、安定した統治が確立されるので、歴史は終わる。

つまり、歴史は世界がアメリカ的なリベラルな民主主義を達成する過程であり、この意味に於いて世界はアメリカ型の政治体制に一極化していく。

年代	1790	1848	1900	1919	1940	1960	1975	1990
国家数	3	5	13	25	13	36	30	61

表 2 リベラルな民主主義の国家の数の推移

4.2 多極化

前述の通り、今後もアメリカ覇権の一極化が進んでいくとの意見がある一方で、世界のパワーは分散しつつあり、多極化に向かっているとの意見もある

4.2.1 軍事力

アメリカの軍力が突出しているという事実は近い将来覆ることはないだろうが、国際社会（特に先進国に於いて）では軍事力の行使には大きな制約がかかり、適切にこの軍事力が機能するかについては疑問が生じるようになってきている。

また、アメリカを始め西欧文明圏では軍備縮小の潮流にある一方で、特にアジアに於いてはその急激な経済成長を背景に軍備増強が行われている。さらに中国はここ10年間に於いて公表されているだけで3倍もの軍事費拡張を行っており、東アジア地域に於けるアメリカ覇権の脅威となりつつある。

4.2.2 経済力

歴史上、近代化を成し得た国は西欧文明圏にしか存在しなかったが、1950年代以降の日本の高度経済成長を皮切りにアジアの急速な経済発展が起きている。また、経済発展をしたという事実はそのままソフト・パワーの増大を意味する。また、ヨーロッパに於いてもEUの発足により新たな経済圏が生まれ、アメリカの経済力の相対的な低下が起きている。

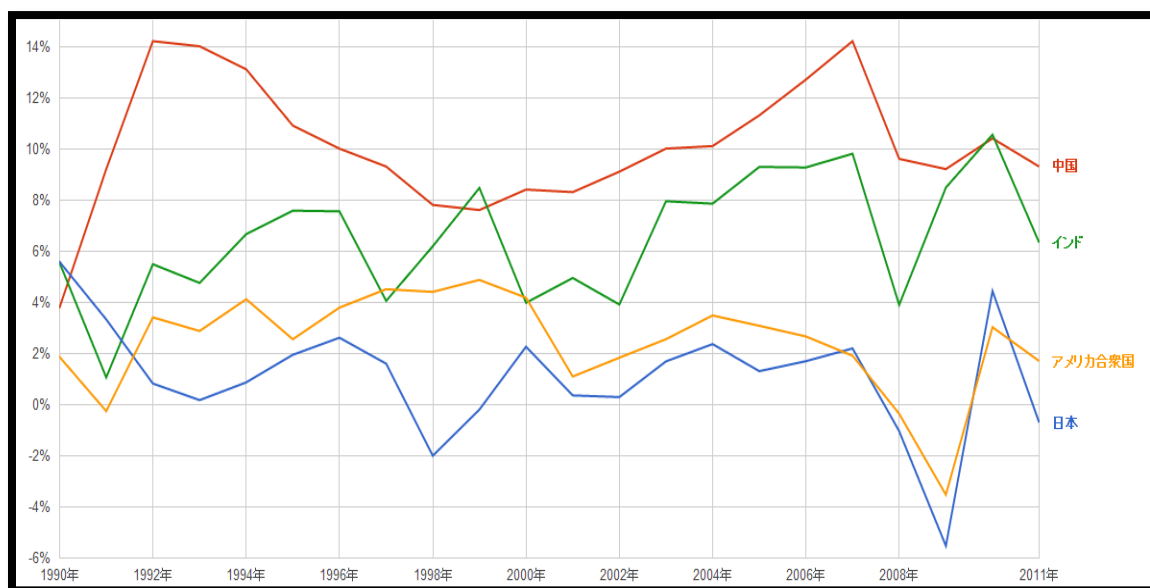


図 3 1990年以降のGDP成長率

4.2.3 ソフト・パワー

アメリカのソフト・パワーは危機的状態にあるとの見方もある。9・11テロ事件はアメリカ覇権に対する挑戦でもあり、その後のアフガン戦争・イラク戦争の泥沼化はさらにアメリカのソフト・パワーに危機をもたらした。

サミュエル・ハンチントン

冷戦崩壊は、アメリカへの一極化を意味するというよりはイデオロギーの対立を軸とした国際社会の終わりを意味している。さらに、グローバル社会の形成により各国民は自らのアイデンティティを求めようになり、特に最も上位のコミュニティである「文明」に自らのアイデンティティを求めようになっている。これらを背景に世界は8つないし9つの文明圏に分かれていっており、多極化が進んでいる。

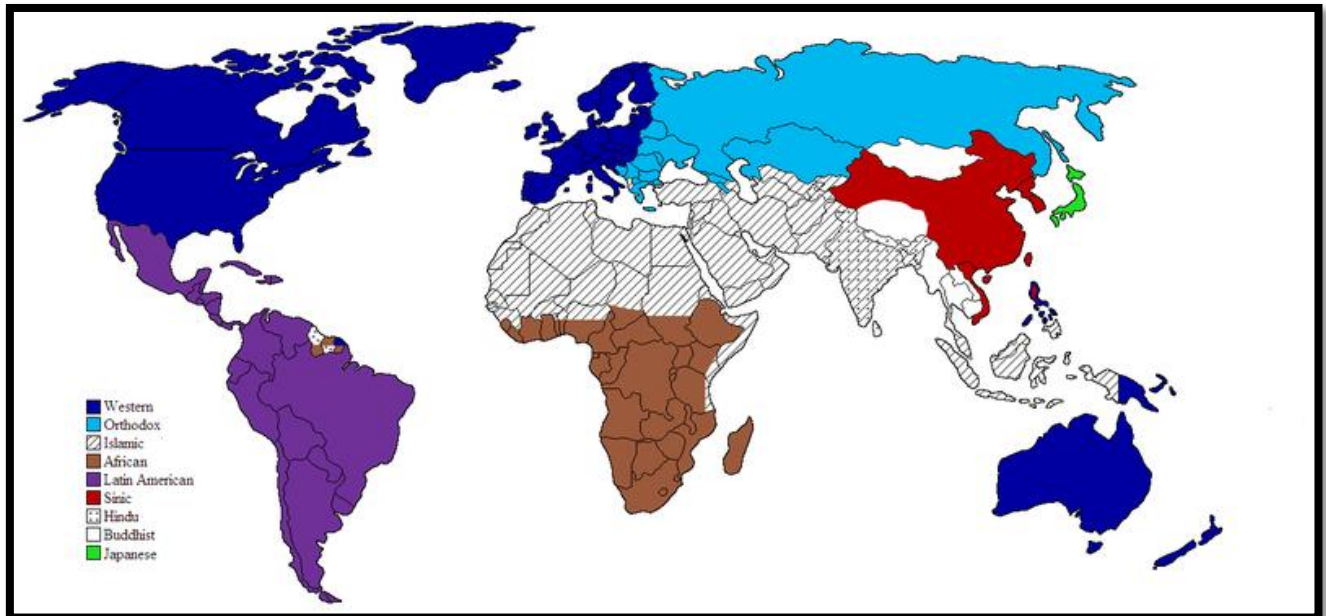


図 4 『文明の衝突』に基づく各文明圏の分布図

5 日本にとるべき政策

5.1 一極化

国際社会がアメリカによる一極化が維持・促進される場合、日米同盟の強化が日本の外交及び安全保障に於いて重要かつ不可欠になる。具体的には、例えば、自衛隊による集団的自衛権の行使などの日米の相互依存関係の深化が有効となる。

5.2 多極化

アメリカ一極支配がいずれ終わるのであれば、より文化的にも地理的にも近い東アジアに於ける日本独自のプレゼンスを高める事が重要になる。具体的には、

ASEAN 諸国との経済的・軍事的な関係強化を通じて中国との勢力均衡を維持していく事などがあげられる。

6 論点

「パワーの要素として何が重要であるか」

「世界は一極化するのか多極化するのか」

「その中で日本はどのように他国と付き合いっていくべきか」

7 出典

- サミュエル・ハンチントン著 『文明の衝突』 集英社
サミュエル・ハンチントン著 『文明の衝突と 21 世紀の日本』 集英社新書
サミュエル・ハンチントン著 『分断されるアメリカ』 集英社
サミュエル・ハンチントン著 『引き裂かれる世界』 ダイヤモンド社
フランシス・フクヤマ著 『歴史の終わり【上】』 三笠書房
フランシス・フクヤマ著 『歴史の終わり【下】』 三笠書房
ジョゼフ・S・ナイ著 『スマート・パワー』 日本経済新聞出版社
防衛大学校・防衛学研究会編 『軍事学入門』 かや書房
防衛大学校安全保障学研究会編 『安全保障学入門』 亜紀書房
曾村保信著 『地政学入門 外交戦略の政治学』 中公新書
防衛省編 『平成 24 年度版 防衛白書』 佐伯印刷株式会社